

Back Number

本論文は

世界経済評論 2022年5/6月号

(2022年5月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

カナダ雁は侵入物か

歌人石井辰彦さんの連作を英語に直していると「滅」という言葉がよく出てくる。で、「わが心いたく痛みぬ滅びゆく種としての人類を想へば」に出くわした時、ふと extinction of mankind をインターネットに入れた。すると直ちに Humans Are Doomed to Go Extinct と題する記事が出てきた。短いが要約してみよう。

「歩く屍」

1965 年は第三世界大戦を見越した Tom Lehrer の歌 So Long, Mom が流行り、1968 年にはスタンフォード大学の生物学者 Paul Ehrlich の The Population Bomb がベストセラーになった。しかし半世紀後のいま、核戦争の恐れは薄れ、人口は当時の 2 倍になったが、アーリックの予言した膨大な餓死はなく、総じてみな豊かになった。

将来を見ると、人口は今世紀の半ばに最大に達したあと減少し始め、その後急速に減少して、2100 年には世界人口は現在の半分になる。

古生物学者として長い目で見ると、哺乳類はそれぞれ 100 万年ごとに現れては急速に消える。Homo sapiens は 31 万 5000 年ほど前に出現、すでに一度以上絶滅に直面している。問題は、人間には遺伝的変異 (generic variety) が少ないこと、また近年精子数が大幅に減少している。理由は大気汚染、人間の過密居住によるストレスなどが挙げられる。

一方、政治家は経済成長を叫ぶが、人類はすでに基本的生産性の 25~40% を独占消費している。これによる生息環境の破壊 (「絶滅負債」) からすれば、人類は既に歩く屍である。

ここで「基本的生産性 (primary productivity)」は「植物が大気と水と日光から作る有機物」を言う、と記事の筆者、Gee は説明する

人類絶滅の時期

この Opinion を学術月刊誌 Scientific American (Nov 30, 2021) に出したのは学術週刊

誌 Nature の編集者の一人 Henry Gee だが、では人類の崩壊と絶滅はいつ来るか。そこで Gee がこの意見を敷衍した本『地球の生命の (非常に) 短い歴史 A (Very) Short History of Life on Earth』(2021 年) を買って読むと、絶滅は within a few thousand years とある (188 頁)。

もとより、太陽系の惑星の一つとしての地球は 10 億年もすれば膨張する太陽に吞まれてしまうことは高校あたりで習うと思うが、幾億年といえは想像の彼方に消える。しかし within a few thousand years となるとゲンと間近になり、読み、書く「歴史」のうちに入る。そんなに近い将来に人間は絶滅するのだろうか。

地上 6 回の絶滅

現在の学説によると、地上ではこれまで 6 回の絶滅があった。最初のは 4 億 4500 万年前、地殻の大々的な変動が原因。2 回目は 3 億 7000 万年前で、植物が増え過ぎたため。2 億 5200 万年前の 3 回目の絶滅は火山の無数の爆発、無数の小惑星が地球に激突した結果だった。4 回目のは 2 億年前に始まり、地殻の変動などによる気候変化 (climate change, 温暖化) によると推定されている。

そして 5 回目の絶滅がスピルバーグが有名にした Tyrannosaurus Rex など巨大な恐竜を絶滅させたもので、6600 万年に始まった。原因は大流星または大きな小惑星が地球に衝突したためという。この絶滅は、恐竜ばかりでなく早期の哺乳類のほか、地上の両生類、鳥、爬虫類、昆虫、海中では生き物の大半、なかで最も種類が多かった生き物だったアンモナイトを総なめした。



佐藤 紘彰

大鹿とマンモスの死滅

最新の絶滅は1万年に始まった。これは地上に生息する生き物のなかで人間が圧倒的存在となって、多数の他の生物を絶滅に追いやってきた。これは Holocene extinction (完新世絶滅) と呼ばれてきたが、人間の悪影響があまりに大きいため、新たに Anthropocene extinction (人新世絶滅) という名前が提唱されているほどだ。

人類の絶滅は向こう a few thousand years 内ともする Henry Gee は、この「人新世」で死滅した動物として大鹿とマンモスを挙げる。これら氷河時代を象徴する二動物は気候変化とそれに伴う食べ物の変化により a few thousand years の間に激滅したが、人間の狩猟がその死滅を促進した。二動物は多くの化石や遺物が残っていて、その死滅に至る模様をかなり詳しく辿ることができる。

うち大鹿 (giant deer) はその巨大な角がアイルランドの湿原 (bog) に残っているので Irish elk とも呼ばれるが、北ヨーロッパに広く棲息し、7700 年前ごろに死滅した。他方、4000 年前まで存在したマンモスは氷結した死骸も出てきたので、DNA を通じた再生すら口にされている。

大鹿やマンモスは石器や矢で殺されたであろうが、ラテン名を *Bos primigenius* とする野牛 (wild ox, aurochs) の最後のものは人間の新兵器鉄砲で射殺された。時に 1627 年。「かつてヨーロッパ全体に多数棲息した動物の最後の一頭がたった一発の弾丸でそれが鉄砲によって打ち倒されたことは悲痛に耐えない」と Gee は記す。

最悪の侵入物は人間

こうしたことを考えても、ぼくにどうしても理解できないものに、ある種の動植物を「侵入物 invasives」と決めつけて抹殺にかかる昨今のやり方である。

特定生態に動物や植物が「侵入」という見方を出したのは英国の Charles Elton で、1958 年

の著作『動物と植物による生態の侵入 The Ecology of Invasions by Animals and Plants』においてだったという。この考えをアメリカで法制に取り入れたのは 1996 年の National Invasive Species Act, クリントン大統領はこれに応じて 1999 年、行政命令をもって National Invasive Species Council を打ち立てた。

もちろん、こうした措置までには「生態侵入」の考えはかなり広まっていたが、この委員会は慎重だった。しかし戦闘的表現に魅かれたのか、侵入種 (invasive species) という「抹殺せよ!」と大騒ぎになるようになった。十余年前のミシシッピ河のアジア鯉とフロリダ海浜の海魚蓑笠子 (ミノカサゴ) はその典型だろう。

アジア鯉は 1970 年代アメリカ南部のアジア移民が中国の鯉を養殖し始めていたのが、1990 年代の洪水でミシシッピ河口に溢れ入り、それが増えながら上流に向かったもの。蓑笠子はインド洋から太平洋にかけての原産だが、華やかな姿なので熱帯魚として輸入、フロリダなどで水槽で飼われだしていた。それが 1992 年のハリケーンで水槽が破壊されて海に押し出されて増え出したのに気づいて大騒ぎになった。

かくて二つの例とも「侵入」させたのは人間だったが、他も例外なく人間が介入している。その上、新しい生態に侵入する上では人間に勝るものはない。なにしろアフリカから出て地球の隅々まで占拠、土地の動植物を押し退け、破壊してきたのである。

大雁を歓迎せよ

日本では最近飛来してきたカナダ雁 (Canada Goose) を侵入物として騒いでいるらしい。何故この豪華な大雁を歓迎しないのかと、ぼくには不審である。

さとう ひろあき 翻訳家, コラムニスト在 NY